東京の観光振興を考える有識者会議
江戸の歴史・文化部会（第２回）
議事録

令和６年７月19日（金）13：26～14：49
都庁第一本庁舎33階特別会議室S2

【江村観光部長】

それでは、定刻より若干時間は早いですが、皆さんおそろいでございますので、これより「東京の観光振興を考える有識者会議　江戸の歴史・文化部会」の第２回を開会いたします。

本日は、御多忙の中、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

議事に入るまでの間、私、産業労働局観光部長の江村が進行役を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、本日の資料を確認いたします。

お手元には、議事次第、座席表、資料１の委員名簿、資料２の本部会の設置要領をお配りしております。また、資料３の事務局資料及び本日のプレゼンテーション資料につきましては、卓上のタブレット端末で御覧いただけます。また､前回会議の資料につきましても同様にタブレット端末で御覧いただけます。

端末は御自由に操作いただけますが、事務局がページ送りを行った場合は皆様の端末にも同じページが表示されますので､あらかじめ御承知おきください。

本日は、６名全ての委員の皆様に御出席いただいております。

開会に当たりまして、田中産業労働局長から御挨拶を申し上げます。

【田中産業労働局長】

産業労働局長の田中でございます。委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、またお暑い中、御出席賜りまして、ありがとうございます。

前回の会議では、徳川家広委員、徳川眞木委員、後藤委員より、江戸の町の成り立ちや邸宅・庭園の魅力、今に残る江戸・東京の文化財などについて示唆に富んだプレゼンテーションを頂戴いたしました。改めて御礼申し上げます。

先月発表した都の調査結果におきまして、2023年に東京を訪れた外国人旅行客は約1,954万人と、コロナ前の水準を上回って過去最高となってございます。また､外国人旅行者による観光消費額は約2.8兆円ということで､コロナ前と比較しても倍以上となっているというような状況でございます。

今後、東京をさらに魅力的な観光都市へと進化させていくために、日本の大切な財産であり、外国人観光客からも関心の高い、江戸の歴史・文化の魅力を磨き上げていくことが重要だと考えてございます。

また、今回、小池知事の公約にも「『江戸・東京の文化』を世界遺産に」というものもございました。引き続き注目を浴びるものというふうに考えてございます。

本日も皆様から忌憚のない御意見をいただければと存じますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ということで挨拶に代えさせていただきます。よろしくお願いします。

【江村観光部長】

それでは、この後の議事進行につきましては田川座長にお願いしたいと存じ

ます。よろしくお願いいたします。

【田川座長】

田川でございます。お疲れさまでございます。暑いですね、本当に毎日。御苦労さまでございます。

それでは、早速会議を進行させていただきたいと思います。

まず、事務局から資料の説明をいただき、その後、本日は大石委員、堀口委員からプレゼンテーションを頂戴いたします。プレゼンテーションの後、意見交換を行いますので、よろしくお願いします。

それでは、まず、事務局から説明をよろしくお願いします。

【前田観光振興担当部長】

まず、主な議論のポイントということで御説明をいたします。

前回の会議での主な議論の振り返りです。前回の会議で委員の皆様からいただいた御意見につきまして、主なものを御紹介いたします。

まず､インバウンドの誘客における江戸の歴史･文化の活用という観点では、平和な時代の町として築かれた江戸の成り立ちにおいて、仏教・茶道・能が重要な役割を果たした。東京は世界最大の都市（圏）で、かつ清潔・安全であることが特色であり、その根底には江戸時代の武家文化がある。安全で平和な東京は、海外の大都市と異なり徒歩で移動・散策できるということが特徴。葵の御紋には多くの外国人が関心を示すところであり、大きなブランド力を持っている。「水」は都市の衛生（清潔さ）にもつながり魅力的で、都市づくりにおける水道の機能などは奥深く、他の都市と比較で江戸の魅力を掘り下げることができる。邸宅と庭園を活用することで、旅行者に奥深い体験が提供できる。例えば、回遊路から庭園を観覧することにより、邸内からの視座のほうが庭園本来の形や魅力を感じられる。「江戸買物独案内」などに描かれた名店には現存しているものがあり、観光資源になるのではないかというような御意見をいただきました。

続きまして、江戸の歴史・文化の魅力の旅行者への伝え方という観点では、観光PRではビジュアルに訴えることが重要なので、近世大名をイメージさせる兜や印籠を活用することが効果的ではないか。それから、「江戸」には、時代と地名の両面がある。Googleマップ等を活用することで、文化財やその土地の情報を携帯で簡単に知ることができる。ARを活用して、目の前にお城を見ることができたりといった取組も行われておりまして、こうした技術を活用して魅力を伝えることは有効というような御意見をいただきました。

次に、保存や保全に係る課題、後世に継承していくべき貴重な遺産についてという観点につきましては、文化財の修復の現場に子どもたちが立ち会える場を多く設けるべき。それから、江戸の文化を受け継ぐ素材となるものが消えようとしているので、保護の取組等について情報発信を進めていくべき。江戸城

は、御殿の跡は残っていないものの、城門は非常によい形で残っている。また、大名庭園も20か所くらいは跡が残っており、寺社もよく保存されている。庶民文化として現代まで続くお祭り・祭礼や、現在まで残る地名は貴重な財産である。

続いて、こういった前回のものを踏まえまして今回の主な議論でございますが、まず、本日のプレゼンテーションといたしまして、開かれた都市としての江戸の特色・魅力について、大石委員からプレゼンテーションをいただきます。そして、歴史や文化にあまり詳しくない方を含めまして、旅行者への効果的な発信や伝え方についてということで、堀口委員のほうからプレゼンテーションをいただきます。前回も、今御説明したとおり、こうした江戸の特色・魅力や発信につきましては御意見をいただいたところでございますけれども、さらに今回のプレゼンテーションを踏まえまして議論を深めていただければと思います。それからまた、前回の議論等を踏まえて、さらに世界遺産等になり得る江戸の普遍的価値、また、その価値を象徴する建造物や景観等、それから芸能、慣習、祭礼等の行事について、また、歩くことで楽しめる江戸の歴史・文化の魅力やこれをさらに高めていくための取組についても御議論をいただければと存じます。

なお、前回の会議におきまして、複数の委員の方から江戸の町における「水」について御意見をいただきましたので、御参考に資料を紹介いたします。こちらは、江戸時代の水道の状況を表す地図でございます。東西が逆になっておりますけれども、神田上水や玉川上水などが描かれております。江戸時代の高度な水道技術は、当時、世界最大の人口を誇った江戸のサステナブルな生活の基盤でございまして、多くの水路が江戸の町を巡り、上水道が江戸城や武家屋敷、町屋に広く水を供給しておりました。当時の水道が今も活躍するとともに、多くの水辺が東京の魅力的な景観等を形成しております。都といたしましても、水辺を観光資源として活用した誘客イベントなど、観光振興の取組を後押ししております。

続いて、次のページは、「歴史・文化を軸にした東京の魅力発信に係る懇談会」の資料からの抜粋でございます。こちらも水についての「なぜ、東京には水辺が多いのか？」ということで資料をまとめておりますので、御覧いただければと思います。

資料の御説明は以上でございます。

【田川座長】

ありがとうございました。

それでは、早速ですが、プレゼンテーションをいただきたいと思います。

まず、大石委員から、約10分程度で、よろしくお願いします。

【大石委員】

では、10分ということで、よろしくお願いいたします。

まず、「江戸」という言葉には、時代（ピリオド）と地域（エリア）の２つの意味があります。そして、17世紀から19世紀後半までの「江戸時代」の都市東京の前提となる「江戸」地域を中心に展開した文化・文明の特徴を、今日、私たちは「江戸風」、「和風」、「日本風」などと表現しています。これらの江戸文化・江戸文明が１世紀以上に及ぶ戦国時代を克服し、直前の豊臣秀吉が朝鮮半島で朝鮮・中国と戦った文禄・慶長の役の戦後処理の上に実現されたことは注目されます。この250年以上に及ぶ長期の平和は、今日、「Pax Tokugawana（徳川の平和）」として評価されています。この江戸時代の基本的特徴である「平和」は、国内のみならず、当時来日した多くの外国人にも高く評価されていたことは注目されます。例えば、レオン・ロッシュの資料などでも確認されるのですが、世界でも稀な「平和」だと、250年以上武器を使わないということで、同時代人が江戸を冷静に評価して客観的な評価を得ているというのは、注目されていいと思います。極東（ファーイースト）の小さな島国日本の「Pax Tokugawana」への高い評価、これが客観性・普遍性を持つと言えるわけです。

さらに、豊臣秀吉以来の兵農分離による列島規模での武士以外の武装解除、それから、全国規模の城下町形成と武士の官僚化、「徳川実紀」にはこれが「通勤」という言葉で出てきますが、その武士の通勤族化は、日本社会の「平和」の基本的枠組みとなりました。「平和」の到来とその価値は、江戸庶民にも自覚的に共有されています。幾つか狂歌・川柳を挙げておきました。「元和から武器は納まる蔵の内」、「名将も　勇士もしれぬ　ありがたさ」、「御武徳は具足をぬがせ　服をきせ」。いずれも「庶民」が平和というものを貴重なものと認識していたことが分かります。

次に、江戸打ち入りの際、「玉川上水紀元幷野火留分水之訳書」という史料によると、「一、城に水を掛るハ警衛之第一故、城を築には山水海浪によりて縄張いたし候事に承り伝へ候、然ルに江戸之御城は御本丸高く、都而土地低、水に潮汐さし、御城下に住る人の困り候」と、当時の城の造り方、江戸城の造り方は、当時のセオリーにのっとり、水道の近く、言わば水につけるのですが、海水が近いために飲み水に非常に困っていました。その結果、井之頭から神田上水、さらには多摩川から玉川上水が江戸の町に送られ、上水インフラが整備されたわけです。

さて、長期に及ぶ日本の歴史を首都機能の視点から俯瞰した場合、飛鳥、奈良、京都、大坂など畿内諸都市を拠点に首都機能を発揮して列島社会を統治した17世紀以前と、江戸・東京という東日本の都市を中心に列島社会を統治した17世紀以後に二分することができます。

なお、鎌倉については、当時の幕府が武士の一部を御家人として編成し、全国的に軍事・警察権を掌握したと見られ、中央政府は依然京都にあったと考え

られます。

こうして見ると、戦国時代の総決算として戦われた慶長5年（1600年）の関ヶ原合戦は、江戸を拠点とする東軍・徳川家康が大坂を拠点とする西軍・石田三成を倒し、全国統治の拠点である首都を畿内から江戸へと移動させる歴史上のターニングポイントであったということが言えると思います。

この転換は、古代以来の東海道、南海道など畿内を中心とする列島編成・秩序から、江戸を中心とする五街道、航路など新たな編成・秩序への変更でもありました。関ヶ原合戦は、時代的にも地域的にも日本史を二分する文字どおり天下分け目の戦いであったわけです。

しかし、1,000年以上政治・経済・社会・文化の中心であった畿内に比べ、家康が武力によって勝ち取り「首都機能」を移転させたフロンティアの江戸は、文明の落差が大きく、当初、その機能の一部を大御所家康が存在する副首都と言うべき駿府と併せて機能していました。権力都市江戸は、権威が備わっていなかった。この後、250年以上続く江戸時代とは、権力都市江戸が京都など畿内諸都市の文化・文明を摂取し権威化する過程でもあったと言えます。

例えば、江戸初期、天台宗の僧・南海坊天海は、京都の鬼門の比叡山延暦寺に見立て江戸の鬼門の上野に寛永寺を創建し、延暦寺の麓の琵琶湖を模して不忍池を整備し、琵琶湖中の島弁財天を勧請しました。そして、京都から天皇家皇子を山主に迎え、輪王寺宮としたわけです。寛永寺境内には京都・清水寺の舞台も築造し、浅草には三十三間堂を造っています。江戸城龍ノ口には高倉屋敷・伝奏屋敷を設け、京都の衣服・風俗の流入拠点としています。人々も多く京都から江戸に移動しました。文化人として、金地院崇伝や南海坊天海などの宗教者、観世、宝生、金春などの能役者、出雲国をはじめとする歌舞伎役者、あるいは諸語り、操り人形、医師・曲直、あるいは施薬院、儒学者・林羅山、棋士・大橋、本因坊、絵師・狩野などがみな西から東へと大移動しているわけです。職人、商人たちも江戸に下っています。京都文化の江戸移入による権力都市の権威化のスタートということになります。将軍家はじめ、江戸の大名家には公家の娘たちが正室として嫁入りします。７代将軍家継のときにはかなわなかったものの、公武合体、天皇家と将軍家との婚姻が図られました。そして14代家茂の際に皇女和宮の降嫁が構想され、実現されます。そして、明治天皇の東下と権力都市東京遷都は権威化の総仕上げということも言えるわけです。近代都市東京は、江戸の権威化達成の上に成立したということが言えます。

首都江戸の特徴というのは、京都文化・文明の移入、摂取のほか、全国260の大名家の江戸屋敷（藩邸）を通じた列島各地域の地域文化との交流・蓄積によっても形成されました。諸大名の上屋敷・中屋敷・下屋敷は、江戸で最新の文化・文明を国元に送るとともに、国元の地域文化を江戸に届けます。江戸は、古代・中世という歴史にも門戸を開き、同時代の列島全域にも門戸を開く、言

わば「オープンシティ（開放都市）」として存在していました。

そして、首都江戸と江戸時代の長期の「徳川の平和」を基礎から支えたのが江戸の教育・リテラシーであります。元戦国大名・北条氏の家臣で江戸初期の文筆家・三浦浄心は、寛永末年に著した「慶長見聞集」の「童子あまねく手習ふ事」の項には、次のように記されています。「聞しは昔、鎌倉の公方持氏公御他界――これは1439年ですけれども――より東国乱、廿四五年以前迄、諸国におゐて弓矢をとり治世ならず、是によつて其時代の人達は、手ならふ事やすからず、故に物書人はまれにありて、かゝぬ人多かりしに、今は国治り天下太平なれば、高きもいやしきも皆物を書たまへり、尤も筆道は是諸学のもとゝいへるなれば、誰か此道を学ばざらんや」と。戦国時代は、手習いすることが難しく、字を書く人は少なかったが、「平和」になった今、身分の上下なく字を書くようになった。書道は全ての学びの基になるので、皆が字を習うようになったとあります。このように「平和」と教育というものが一体として考えられ、長期の「平和」というのは江戸の教育によって支えられていたということが指摘できるわけです。

「徳川の平和」は、ただ戦争がないということではなく、教育・教養の普及、リテラシー向上に基づく命の大切さを思う思想に支えられた文明でありました。そして、その教育・教養が「平和」と同時に笑い・ユーモアを伴うことであったことにも注目したいと思います。

例えば川柳として、「御具足は　春と夏とに　見るばかり」、「太平の　矢狭間は風も　ぬけぬなりばかり」と、狭間ももう蓋をされてしまっていると詠んでいます。

「引札は　指をなめ＼／　斜(はす)に来る」と。これは、引札、広告を配る人が長屋を斜めに往復しながら引札を配っている。今のポスティングですが、これが盛んに行われている。江戸時代の人は字が読めないというイメージがあったのですが、そんなことはなく、日々こういう形で字と接しているわけです。

「うたゝ寝の　顔へ壹冊　屋根に葺き」と、本を読んでいてそのまま寝てしまったという句もあります。

旅行へ行って、「川止(とめ)に　手にはを直す　旅日記」とみなが旅日記をつけながら旅をして、川止でやることがないとそこで「てにをは」の助詞推敲しています。

次の「通りぬけ　無用で通り　抜けが知れ」。字が読めるから、「通り抜け無用」という貼り紙で、逆にここが通り抜けの道ということが知れてしまうという、笑いというのが絶えずあります。

奈良・平安から始まって、ずっと歴史的な事件も取り上げ、そして、それを笑うということはみんなが知っているということになります。

例えば、最後のほうで、文化期のもので、「膝栗毛　はねて一九は　おちを

とり」。「東海道中膝栗毛」がヒットしたことを詠んでいます。

江戸の人たちが歴史を平和の中で笑いとともに記憶している、これも私たちは世界に発信していっていいことだと思います。

江戸の長期の「平和」が、庶民のリテラシー・教養と笑いに基礎づけられていたということは重要で、今日の日本と世界にアピールしたいと思います。

歴史と列島諸地域に開かれた開放都市の江戸は全国性・国際性を特徴とし、全国から参勤交代、あるいは奉公、商売、観光など多くの人々が江戸に流入した。

江戸行きのためのマニュアル本として、方言辞書が編さんされます。「仙台浜荻」は、仙台語と、江戸語2,646語を対照させたイロハ順の辞書です。標準語というんですかね、江戸語と、それから仙台語。各地で同様にお国言葉と江戸の言葉の辞書を出しています。交流の深かさと、文化をお互い大事にしたことが見えてきます。

こうした江戸と地域の異文化交流に備える意識、あるいはシステムが出来上がっており、このように江戸は全国各地から旅行者、参勤交代の武士などが集まって来て、様々な文化・風習・言語が混ざり合う共生都市ということになります。

16世紀以前の列島社会の歴史的・地域的文化を集積し、さらに、17世紀以降の文化流入を許容しつつ、新たな文化を創造する「開かれた都市」であったということが言えます。

したがって、全国から江戸に来た人々にとって「居場所のある都市」、自分の国元の文化が江戸のどこかでつながっているということが言えると思います。

江戸を「公界」と呼ぶ史料もあります。俗世界を超えたという意味です。

以上、権力都市として成立した江戸は、「笑い・ユーモア」を伴う教育・リテラシーを基礎に、250年以上の「平和」を通じて京都・畿内など列島各地の歴史的・地域的な情報文化を流入し、蓄積・洗練して全国に発信するというサイクルを繰り返したということが言えます。

近代首都「東京」と近代国家「日本」は、この発展と達成の上に成立したと言えるのです。

時間なので、ここで終えたいと思います。

【田川座長】

ありがとうございました。なかなか興味深い話がたくさんあったというように思います。また後ほどお話を伺います。

それでは、次に、堀口委員のほうからプレゼンテーションをよろしくお願いします。

【堀口委員】

お話をさせていただきます。堀口茉純と申します。

もう既に諸先生方から大変有意義なお話が出そろったところかと思いますが、私、歴史作家、歴史タレントとして活動する一歴史ファンの立場から、皆様とはまた少し違った角度でお話をさせていただきたく存じます。

まず、一般的に「江戸」と言ったときに何をイメージするかということについて、特にふだん歴史・文化に興味が薄い方々にとって何が魅力的に映るのかなということにつきまして、サンプルとして私のYouTubeの再生回数上位のサムネイル画像というのを資料の１枚目に表示いたしました。左から、「江戸の一日」、「江戸の銭湯」、そして次が「江戸の暖房」ということなんですが、これは電気がない時代にどのような工夫で江戸の人々が冬を乗り越えていたのかというようなお話です。そして、「江戸の食事情」、「江戸人の一生」というふうに続きまして、YouTubeという大変局地的なプラットフォームでのサンプルではございますが、これで何が分かるのかと申しますと、第１回目の会議の際に小池都知事からも御指摘があったように、やはり江戸の中でも江戸の暮らしというものに興味関心を示す方が一般的にはとても多いのではないかなというところでございます。

既に周知のとおり、江戸はエコな社会であり、また、SDGsであったりLGBTQといった今日的と思われがちな問題を日々の暮らしの中で自然と解決しておりまして、現代人の我々にとってもとても学ぶところが多いなというふうに感じております。ただし、一般的に、やはり江戸と東京というものがまだまだイコールになりきっていないのかなというようなところも感じます。例えば、歴史・文化の観光といいますと、やはり京都に行こうとか奈良に行こうというふうに発想をすることが多いのかなと。東京がこの江戸の歴史と文化の発信地であるというイメージがまだ薄いのかなというようなところを実感しているところでございます。

特に、多くの都民にとりましても、自分たちが暮らす東京に江戸の歴史であり文化がありという、これが息づいているということがあまり意識されてこなかったというのが現状なのかなと。今、小さな子どもたちの学校などでも取組として地域の勉強をというようなことはありますが、まだそういった意識というのが薄いのかな、なんて感じることが多い。

その中で、東京のスローガンとしてこの「江戸を世界遺産に」というふうに打ち出していくことは、東京が江戸の歴史・文化の発信地・中心地であったということを内外にPRしていく上で極めて有効であると感じました。

その上で、キーワードになってくるのが「徳川将軍」と「浮世絵」、この２つは多くの方とイメージを共有しやすい言葉なのかなと感じております。

例えば、今年はハリウッドで「SHOGUN 将軍」というドラマが世界的な大ヒットになりまして、昨日、ニュースになったところによりますと、エミー賞でも今回最多の25部門でノミネートされたというようなことがニュースになってお

りました。先日、私がニューヨークに行った際にも、やはり現地の方に、この「SHOGUN 将軍」の主人公・吉井虎永というのは徳川家康公がモデルになっている武将なので、徳川家康というのは本当にこういう人だったのか、どういう人だったんだということで大変盛り上がったんですね。ですので、この徳川将軍という存在が非常にグローバルなブランド力を持っているなということを実感したところでございます。

また、浮世絵に関しましては、北斎の「富嶽三十六景　神奈川沖浪裏」がこのたび千円札の裏側に印刷されましたけれども、日本はもちろん、海外の人気も非常に高いわけです。ただ、浮世絵というものが江戸時代の日本文化であるということは知られておりますが、江戸で生まれて江戸の産業として発展したものであるということはそれほど浸透しておりません。

やはりこの江戸・東京の宝として徳川将軍、そして浮世絵を打ち出して観光にさらに活用していくということが、より多くの方に江戸・東京の魅力を知っていただくきっかけになるのではないかと考えました。

では、具体的にどのようなことが考えられるのかということで、一番最初に、「写真――これは動画も含むのですが――（SNS）映えする江戸」ということでお話をさせていただきます。

一例として、Instagramで「東京」、もしくはローマ字で「TOKYO」というふうに入力いたしますと、スカイツリーであったり、東京タワーであったり、赤提灯・ネオンの路地とか、食などの写真がどんどん上がってくるわけなんですが、この状況が何を意味しているのかというと、やはり東京は日本を代表する最先端の魅力的な町であるというイメージは定着しているかと思うのですが、歴史と文化がある、つまり「江戸」のイメージというのがまだまだ希薄なのかなということを感じました。

ただし、例外といたしまして、浅草エリアというのは、かなり江戸を感じさせる写真というのがSNS上にも上がっております。これはやはり浅草寺様を中心に歴史的な建造物が充実しているということ、また、周辺の商店街で食文化であったりとか、金魚すくいなんかの経験もできます。それから、雷おこしを作っているお店があって、それを見学できるというような点が大きいのはもちろんですが、例えば、伝法院通りという、これは仲見世通りを東西に横切っている通りでございますけれども、ちょうど右上の写真が伝法院通りなのですが、「江戸らしさ」を演出する新しい景観整備というのがなされているのが特徴的かなと思いました。古い建物が残っているわけではなくて、外観を江戸風、和風に見えるように統一したり、また、手前側にあるのがこれは歌舞伎の登場人物、白浪五人男の日本駄右衛門ですけれども、等身大よりも少し大きいぐらいのフィギュアが町なかに置いてあったり、こういった景観整備がなされております。

この裏側には、地域の人たちによる「江戸」への理解を深める取組と積極的な活用というのが非常にうまくいっているということがあり、結果として、町全体の印象として、東京で「江戸」を体感できる場所といえば浅草だよねということになっているということかと思います。

こうした「江戸」を意識した町づくり、町おこしというのを別の地域で行うことで、さらなる集客、それと同時に、また集客の分散、やはりオーバーツーリズムの問題なども今後出てくるかと思いますので、そういったことが考えられるのかなと。

場所といたしましては、例えば江戸四宿（品川、板橋、新宿、千住）というのは、既に部分的に江戸を感じさせる商店街であり繁華街などが展開しております。また、23区外、もちろん島嶼部などにも江戸の歴史・文化というのが息づいておりますので、町全体をつくり変えずとも、提灯であったり暖簾であったりで統一感を出したり、もしくはこういったフィギュアを置いてみたり、また下段の右側に浮世絵パネルで写真を撮ったときの私の写真を載せましたけれども、こういったフォトスポットをつくるなどでも、フォトジェニック、江戸を感じさせる、写真映えする江戸というのをつくっていく上では有効なのかなと思う次第でございます。

２つ目といたしまして、「体験する江戸」。こちらは、それぞれの小見出しに対応した写真が次のページにございますので、併せて御覧いただければと思います。

やはり観光中の体験として多くの方が楽しみになさっているのが食であると感じます。既に数多く存在しているところではございますが、食の体験の付加価値として、やはり江戸からの長い歴史がある食文化であるということを積極的にPRしていくということが大切なのかなと。例えば、和食であったり和菓子といった江戸時代に育まれた食文化を自分で作る、もしくは作業を見学する、食べるといったことで、総合的に江戸を体感する経験というのは強く記憶に残る観光経験になるかと思います。

２つ目といたしまして、日本舞踊、茶道、香道などは江戸時代に庶民にまで普及した文化、つまり大衆性があって気軽にトライできる伝統文化であるという魅力があるかと存じます。体験自体はもちろんなんですが、扇子、お茶菓子、お香などは持ち帰り可能なお土産にもなります。

そして、和紙の紙すきや浮世絵の刷り体験などは、江戸文化として今後さらに打ち出す価値のあるジャンルだと個人的に思っております。私は、アニメ・漫画などのオタクでもあるんですけれども、やはりこうした二次元文化の発達において外せない重要な要素がこの和紙と浮世絵になってまいります。浮世絵を用いた江戸文化のイマーシブ、つまり没入型のシアターというのは、今、様々な美術展などでも展開しているところはございますが、やはり浮世絵で見る江

戸文化の没入体験、これは鑑賞だけではなく体験で面白さを提供するという意味でもとても面白いのではないかと想像いたします。

また、４番目といたしまして、着物を含めたコスプレに関しましては、江戸時代に既に「俄」としてコスプレ文化は定着しております。こういったところからコスプレ文化というのは江戸時代からの文脈で語ることができます。着物をお召しになるというのはもちろんですが、甲冑や兜、刀剣などを身につけて将軍や忍者、花魁になる、江戸時代の装い文化を通じて江戸の歴史・文化を体感していくということで、創作作品のイメージと実際の歴史・文化とのギャップについても知るきっかけになるのではないかと存じます。こういった記念写真をSNSにアップすることで魅力も拡散してまいります。

３つ目、最後に、「歩く・船で楽しむ江戸」ということで、第１回の会議で家広様からも御指摘がございましたが、歩いて観光できる大都市であるというのは東京の強みであると感じます。東京には本当に地域によって強い個性があります。私も15年ほどテレビ番組などで歴史の案内的な役割をさせていただいているんですけれども、やはり江戸時代からの歴史の名残が町の個性になっているなと感じ、また、ストーリーを持った町歩きも本当に楽しいと感じております。ただ、やはりデメリットといたしましては、震災や空襲で建物自体が残っていない、町のシンボルになるはずであった江戸城の天守というようなものが――これはもちろん理由があって残っていないわけなんですけれども、そういうものが現在残っていないことによって、江戸城がすばらしい名城であることも少し伝わりにくい状況があるかと存じます。ただ、メリットといたしまして、江戸時代の町割や地形、それからこれは眞木様から御指摘があったところでございますが、すばらしい大名庭園が残っております。今あるこうしたものに、浮世絵やCG、それからAR、VR、アプリ等の活用でデジタル歴史観光というのをさらに展開していく。そして、スタンプラリーであったりとかゲーム要素を加えることによって、一種のウオーキングアトラクション化すると、従来の歴史ファンだけではなく、多くの観光という意味で江戸・東京の町歩きというものが定着していくのではないかと考えております。

また、クルージングでの江戸・東京をもっと楽しむというような視点もあるかと存じます。やはり江戸は水路の町でありまして、その名残が残っております。墨田川や日本橋川、神田川など水路を利用したクルージングというのは、歴史観光という意味で大変魅力的ですが、やはりデメリットといたしましては、現状、川に対して建物がお尻を向けているエリアも多いといったような部分がございます。ただ、やはりそういったところをよく見ていきますと、江戸時代の石垣を間近で見られたりであったりとか、あとは、川面からの眺めというのは都民にとっても神聖な景観になっていると思います。浮世絵やCGを用いたやはりAR、VRの活用はもちろんなんですが、オーディオを活用しまして歴史の解

説を加えた歴史観光、また、川沿いの老舗や企業様の協力によって江戸文化の体験型のアトラクションにしていくことも可能なのかなというふうに感じたところでございます。

お時間になりましたので、以上で私のお話とさせていただきます。

【田川座長】

ありがとうございました。かなり明確にいろいろな御提案をいただきまして、ありがとうございました。

それでは、事務局の資料や今日いただいた大石先生、あるいは堀口さんのプレゼンテーションを踏まえまして、皆様から御意見をいただきたいと思いますが、論点の例として、先ほどもお話がありましたけど、開かれた都市としての江戸の特色・魅力、旅行者への効果的な発信、あるいは伝え方、世界遺産になり得る江戸の普遍的価値、あるいは歩くことによって楽しめる江戸の歴史・文化の魅力、こんなところが今日の論点かと思います。

前回、お三方から御説明を、プレゼンテーションをいただきましたが、今お二人の話を聞いて、さらに追加、あるいは感想も含めて、御意見をいただければ幸いです。

それでは、どなたからでも結構です。

では、徳川（家）さんからよろしくお願いします。

【徳川（家）委員】

前回言いそびれたことも含めて、そして、今日のお二方のプレゼンに対する感想もいろいろ混ざってくるんです。

まず、これ、江戸文化といって、どこの国でも歴史・文化を楽しむといったときにやっぱり建物なんですよね。町割は残っています、庭園は残っていますといって建物がほとんど残っていないのですが、意外なことに、今日、画像資料を持ってこられなかったのは残念なんですけれども、上野に東照宮がございまして、これは1651年に建てたものがまだ残っているんです、そのまま。そして、これが非常にきれいになっている。金ぴかなんですね。全部金箔で建物を覆っているので、お参りしただけで金運が向上しそうなすばらしいお社なんですけれども、大変残念なことに、もともとは上野寛永寺の境内で、神仏習合でしたから、五重塔がすぐ近くにあるんですけれども、その五重塔が上野動物園の中なんですよ。現在、重要文化財ですけれども、さらなるグレードアップも期待できますし、インバウンドのお客さんはものすごく大勢行っていて、都内在住の方はほとんど御存じないという非常にねじれた状態にありますが、これが何とかできないかなというのがまず１つございました。

そして、江戸文化というふうに、私たちにとって異質なものというか、断絶しちゃった過去のものなのではなくて、実は相当なところ、そうは言っても、これ、明治維新でも江戸の庶民というのは全然動いていませんし、旗本、御家

人も相当数残っていますので、連続しているんですね。関東大震災があろうが、空襲があろうが、何となくまた戻ってきてしまうということで。外国から来られた方が東京に来て何が面白いかというと、これだけ混み合っているのに何で乱闘騒ぎにならないのかと、そこなんです。狭いところで共存していくというのは、これは幕府ができたときに一番苦心して。大体、関ヶ原の戦いから元禄時代ぐらいまで、終戦から今の日本までと同じぐらいの時間をかけて、狭い中で人が平和共存していく、身振り手振りというか、新しい文化をつくっていったわけでございます。裏長屋にしても、六畳一間ぐらいのところに４人とか５人とかが暮らしていた。わあっと薄い壁だけで連なっていたわけですから、そこで音は聞こえるけれどもプライバシーを尊重するふりをするとか、そういう文化が発達していた。それは今日に至るまで続いている。ですから、意外なことに、ハーモニカ横丁もゴールデン街も、もっとマニアックなところで阿佐ヶ谷スターロードとかも、全部これ、江戸文化がそのまま形を変えて続いているというふうに説明すると奥行きが出るのではないかと。

空間と体に加えまして、食文化も、例えばおすしというのは、これ、租庸調の中に出てくるんですね。ただ、それはなれずしなんですよ。今の握ったシャリの上に新鮮なネタが載っかっているというのは200年ぐらい。でも、そのほとんどの変化は江戸時代に入ってからなんです。ということで、実は江戸文化の最大の特徴は変化していくことなんじゃないかと。原形を残しつつどんどん変化していく。ですから、カツカレーもラーメンも、インドやフランス、それから中国だったりの原形を残しつつも、やっぱり日本独自のものになっている。コーヒーの飲み方１つ取ってももうこれは日本独自になっている。これ全部、江戸文化の名残と言っても過言ではないと思うんですよね。こういう日本と明治以降に、あるいは開国以降に入ってきた食文化の日本化したものが、今、世界的にまた関心を呼んでいるということがあるということです。

そして、江戸文化で私はエコという話がちょっと違うと思っていて、そもそもこれは産業革命以前だから、自然にある材料を人間の労働でもって加工する以外の道がないんですよ。そうじゃなくて、江戸の特徴は何かというと、これ、貧乏でも惨めではない暮らしというのを一生懸命考えたということにあると思うんですね。分かりやすい例が古着屋さんなんですよ。だから、江戸っ子の大半は多分おしょうゆで煮しめたような色の服を着ていて、何十年も同じ繊維が服としてどんどん持ち主を変えていくと。それは長屋もそうですし、どんなに貧乏でも、でも、水道の水は飲めるんですよね。それはやっぱり戦国乱世がなぜあんなだらだら続いたかというと、ものすごい数の貧困層が暴れ回っていたからだと。じゃあ、貧しくても――産業革命以前ですから、これ、貧困層が圧倒的多数なのは変わらないです。それはどうすればいいかというと、質素であっても惨めではない。だから、あちこちに花を植えてきれいにして、食べ物は

供給が尽きないようにして、可能な限り物価も統制して、そういうことをやってきた。その中で和の文化が醸されてきたのだというふうに思っております。

ですから、歴史的な経緯があって今の東京の特異性というのはあるんですよということを、そんなことをがみがみ言っても辟易されるだけなんですけれども、一応、予備知識として少なくとも観光に携わる方たちには知っておいていただくのはいいかなというふうに思います。

ちょっと長くなりましたけど、私の感想は以上です。

【田川座長】

今のお話は、多分本質的な話だと思うんですね。要するに、そのときの時代のガバナンスがどう効いていたかということに。文化とガバナンスは常にどの時代でも同じレベルで動いているので、文化が発達するということは、その時代のガバナンスがかなりしっかりしているということに多分なるんだろうと思います。今はどうかというのはなかなか難しい議論かと思いますが、そういうことだろうと思うので、今のお話は非常に本質的な話として考えておかなくてはいけないことだと私は思います。

それでは、後藤さん、どうですか。前回ちょっとまた言い足りなかったこと、今お城の話も出ましたから、どうぞ。

【後藤委員】

ちょっとお城の話から遠ざかってしまうんですが、大石先生の話とか堀口さんの話を聞いていて、今ある東京が江戸から引き継がれた東京なんですけど、やっぱり260年の平和の世というものが今の東京をつくっていて、恐らく日本史上、あるいは世界史上と言っても過言ではないかもしれないんですけども、それだけ要は戦乱のなかった時代というものを徳川将軍家がつくってきたというところだと思うんですけれども。

そういう中で、ちょっと観光という視点から、旅行者ということで考えると、いろんな資料がいろんなところに江戸期のものは残っていて、例えば「江戸図屏風」という江戸の初めの頃の屏風を見ると、それこそ大名屋敷は観光地化していて、日暮門の前に多くの人たちが、ずっと一日中見ても飽きないというような観光地があったりとか、後半になってくると、かなり観光案内的なものが、あるいは大名を記した武鑑が発行されるんですけども、それを持ってそれこそ大名行列を観光案内みたいな形でされている人がいたりとかという、平和の世がもたらした文化みたいなものが非常に発達をしていて、例えば、浮世絵の話もありましたけれども、「名所江戸百景」だとか、幕末の頃に示された、描かれた百数枚の観光的な名所絵というものを今の写真と突き合わせをして、何が変わって何が変わってないのか、東京がどれだけ歴史的な遺産というものを今日伝えているのかというようなことをやってみるのも、お話を聞いていて面白いのかなというふうに思いました。

【田川座長】

ありがとうございました。文化は比較すると一番面白いので、比較文化論という学問もあるようですから、そういう意味では比較するというのは非常に大事かなと。比較した中で新しいものを見つけ出すということも大事かな。最近、江戸と東京の比較をしっかりやっていないのかなという感じがするんですね。そういう意味では、今回この部会ではそういうところの視点も大事かなと思っています。

では、次に徳川眞木さん、どうぞ。

【徳川（眞）委員】

今、皆様のお話を伺って、やはり自分の専門以外の立場でそれぞれ江戸を考えていただいたので、それぞれ新しい気づきがあって、特に今日、大石先生のお話は、本当に史学的な裏づけがあって、先行研究についてもしっかりと踏まえた上で、実は1600年の関ヶ原を起点に東京というのは大きく日本の中で時代を変え、そして、地域として京都にあった中心、大坂にあった中心を全て東京に新しい都市をつくるという家康の都市づくりを基に、もう新しくつくって始まったものだということを学術的にも御説明いただいたというのがはっきりすごく分かってよかったと思います。

その上で、やはり今まで自然発生的に東京の観光を練ってきた中で、私たちの町、私たちの仕事、私たちの見つけた遺跡というのを学んだり商品化したりというのが進んでいるんですけれども、大きなフレームでそれを回遊性を持たせたり、他の都市と比較をしたり、前回、大石先生が最後におっしゃいました、やはり五街道ができて、日本の中で自由に安全に旅行をして商品を売ったり、要は政治協議のために大名が大名行列をして参勤交代をする。そうすると、大勢の人が移動することで、先ほどの方言辞書のこともそうだなと思ったんですが、江戸を中心とした日本の国という――それまでは群雄割拠。でも、日本の国はこういう文化ですよ、こういう国なんですよというような「和風」とか、大石先生おっしゃっていましたね、「日本風」という概念がしっかりと海外に向けて比較できる形で言えるようになるのは、この17世紀から19世紀にかける江戸の時代の文化だと思うんです。

それは、例えば産地であるところで工夫をして興った工芸品だとしても、購入者は、江戸で売られる、買われる。ですので、江戸好みというもので、やはりそれ以前の地域で販売していたものから大都市で消費されるような、例えば農産物になったり、大量に生産できるようになったり、多くの人が買ってくれるような新しいデザインとか素材とか、そういうものがどんどん生まれてくる。つまり、それまでは地域という狭いところで自然発生的に育ってきたものが、街道ができたことで江戸という中心点で大きく江戸文化という形で発信できたのが、今日、大石先生の話で理解できたな、何かお授業を聞いている感じだな

と思いました。

なので、私は逆に、よく京都は千年の都とかCMとかをしているんですけど、東京は、前に東京都さんが開府400年という大きな節目をやってくださいましたが、やはり東京の歴史は江戸1600年からずっと今に継続している江戸文化、東京の文化、東京しかない、東京が発信したという視点を持ってやっていったらいいんだろうということを思いました。

堀口さんのお話は、もう誰よりもやはり現代、これから私たちがやるべきことというのに近い視点でお話をしていただいているので、今ある観光客が享受しているような浅草のサービスだとか人気のあるもの、そういったものはどんどん取り入れていって、今までやってきた江戸の考え方をこういった新しい、特に東京はサブカルチャーの発信地として世界的に認知されていますので、その能力のある方たちの力を借りて、やはりただ遺跡をこれが遺跡で石垣ですというのではなくて、日本で一番大きかったお城は江戸城だよというのがその場所で、東京駅の前に立ったら体感できるとか、ちょっと大きなことを考えられるように、視点を考えて面をつくるという形がいいと思います。

面という意味では、もう一つは、ちょっとお話を聞いていて、いろいろな波を浮世絵でしています。でも、波を見に行くのには旅行では無理だとすれば、そうしたらほかの景色も見られるように、浮世絵で描かれた場所を散策するルートとか、そういうのをもう少しオール都の関係でやっていけたらいいと思います。

あとは、ちょっと私が新しい気づきとしたのは、どうしても観光ですと、食とファッションとか、そういうものを楽しみに私はしているんですけれども、着物といいましても、例えば江戸時代に着た丈夫で長もちしてしっかりもつような農地の人たちの働く着物で残っているもの、つむぎですとか、それから藍染めにしたような、そういうものの江戸好みのもの、華やかな商家の人たちが着たもの、そして最後に武家好みというのが、それ以前の桃山期とはがらっと違って江戸小紋などがありますので、やはりそういった視点で、東京は大都市ですので、町の商業者が今既に発信しているものに逆に対抗する、漏れているものを拾い上げる形で面をつくっていくというのがよろしいのではないかなと今日お話を伺って思いました。

【田川座長】

ありがとうございました。

では、まだ少し時間もありますので、大石先生に庶民のリテラシーというところを含めて、もうちょっと突っ込んで少しお話を続けていただけるとありがたいと思います。

【大石委員】

ありがとうございます。

今の眞木さんのお話も引きつけて私なりに考えてみますと、京都を江戸が凌駕する時期がいつ頃かと、イメージとして18世紀後半ぐらいの宝暦・天明期ぐらいかと思います。ちょうど江戸で「江戸っ子」、「大江戸」という言葉がはやる時期です。その頃から江戸の人が京都や大坂に行って論争します。たとえば、江戸にあって京都にないものとして、例えば、将軍が８代吉宗が、桜を植え桜の名所を作ります。江戸の東西南北にそれを江戸っ子が大坂で自慢するというようなことが見えてきます。最初はゼロ出発だった江戸がだんだん文明化し意識の中にも育っていくわけです。

さらに、これは私見ですけども、富士山ですね。これが京都、大坂からは見えないわけですが、江戸でしきりにこれを浮世絵などで強調します。真ん中に日本橋があり、江戸城があり、そして富士山があるという構図で描かれますが、これなども富士山を江戸のほうが取り込んで――まさに日本一の山というですね。首都としての地位を意識していくということも言えるかと思います。

さらに、歴史にかかわるリテラシーについて、「三将で　思ひ＼／の　時鳥」という川柳があります。松浦静山の「甲子夜話」が初出かと思っていますが、この句をもう江戸市民が共有しているわけです。「四日目は　明智日陰の　守になり」とか、みんな知っていないと笑えない。

次は、大坂の陣です。「安康と　書いたで鐘も　釣し限り」と、国家安全と書かぬが落度だったというんですね。こんな形で、６文銭に関して、「幸村は生きる気でない　紋所」、６文の渡し銭ということです。

今、の大学生や高校生に言っても何が面白いのか分からないだろうと思いますがそうして見ると、江戸の人たちの歴史に対する意識の豊かさが分かります。「芭蕉翁　ぼちやんといふと　立留り」なども同じです。

そんなところも含めて、江戸の人のリテラシーは、決して私たちのほうが優れているとは言えないように思います。

【田川座長】

川柳に深みがあるから面白いなと思っています。なかなかちょっと読み取れないものもたくさんあるんですが、昔から、江戸時代にこういうものが歌われていたというのも、私たちもなかなかふだん目にすることがないので、非常によかったなと思います。

さて、今日のテーマの中にも、人にどう伝達するかということで、先ほど堀口さんからいろいろ聞きましたが、さらに何かございましたら御意見。今、皆さんの意見を聞いて何か御感想なり、さらにもう少し進めたらどうかなと。

１つ問題として、東京の場合、ふるさとの意識が非常に少ないんです、東京ね。私、仕事をしながらずっといつも思っているんですけど、最近、「シビックプライド」という言葉があって、ふるさと、郷土愛なんですが、ただ単に愛しているだけじゃなくて、愛して自分で行動するという。ヨーロッパではシビ

ックプライドというのは非常に盛んで、いろんなまちづくりをしているんですが、観光立国の基本にも、住んでよし、訪れてよしの国づくり、まちづくりと書いてあって、住んでいる人が幸せや楽しくないと訪れないよという、そういうことを言っているんです。そうした意味で、こういうことを東京にいる子どもたちにどのように伝えていったらいいか。その辺のアイデアは何かありませんか。

【堀口委員】

やはり、今日、大石先生のお話にもあったように、笑いの文化なんですよね、江戸は。本当に楽しいものだというところから入るのが、どうしても歴史のお勉強のようになると入り口としては何かかしこまらなきゃなというような気持ちもある中で、先生がおっしゃったとおり、やはり江戸というのは、これは知性がある程度あるという上での割と高度な笑いだと思うんですけれども、そういった楽しい時代だったと思うんです。特に本当は家広様のお話にもあったように貧しさがある中で、いかにして楽しく生きようかというところで、こういった知的な楽しみというのを享受していた時代だと思うので、やはり江戸を伝える上でも楽しさというものは絶対なきゃいけないのかなというふうに感じています。

今日、皆様のお話をお伺いして感じましたのは、先ほど江戸はエコじゃないじゃないかというふうに家広様がおっしゃっていたのは、まさしくそのとおりで、今使われている意味のエコではやはりないですね。江戸がエコであるというのは、とてもフレーズとして分かりやすいので、よく知られているところではございますが、今日的な意味の地球に優しいエコではなく、やはり貧しさのために人々が行っていた工夫の中から結果として今見るとエコだねというふうに感じるようなことになっているという文脈だと思いますので。でも、その工夫ができたというのは、後藤先生からお話があったように、やはり平和であったからこそ庶民が暮らしを充実させるためにいろいろな工夫ができた、それがエコになっていたりとかSDGsに見えたりということだと思うので、そういった文脈をしっかりと伝えていくことが世界遺産、もしくは世界文化遺産への道筋ができてくることになるのかなというふうに感じました。

今、眞木様のお話の中で、街道によって江戸の文化であり情報なりが地方へ、地方から江戸へという流れがあったという御指摘はまさにそのとおりで、私は足立区が地元なんですけれども、足立区には千住宿があって、この通りを通って水戸にお帰りになられたんだなということを想像するだけで私なんかは楽しいんですけど、まだ見えないので、多くの人にこの道をあの水戸黄門が通ったんだとか、徳川慶喜公が通ったんだというのをイメージがしにくい状況にまだあるのかなという部分があるので、こういったストーリーというものをどうやって見せていくのかみたいなところに、東京の新しい観光という意味で何か発

見が出てくるのかな、なんていうふうに、今日、先生方のお話を拝聴していて感じました。

【田川座長】

ありがとうございました。

私も、ツーリズムの人間で長くこの仕事をしていますが、江戸時代に一番ツーリズムが発達したんです。それは前提が平和であったということだと思います。

そのことが結局「御師（おし）」とか「御師（おんし）」とかと言われている、今まで言う添乗員みたいな仕事で、お伊勢参りとか富士山の富士講とか、そういうものできたのもみんな江戸時代で――戦争しているときに、戦国時代にそんな遊んでいられないですよね。それから、庶民が藩を出るというのもこの時代からですね。積立旅行で長屋の誰かが順番に行くみたいな、そういう時代が元禄から先あるんですが、そういうのを読み取ると、やっぱり平和をつくってきた江戸時代のガバナンスというところにも１つ注目すべき点があるのかなと思います。今の現代人に、教えると言うとおかしいのですが、伝えるべきテーマがあるのかなという感じです。

そういう意味では、オープンシティであった江戸という大石先生のお話の中で、この江戸の新しい文化を今の若い人たちに伝えるとしたら、先生だったらどういうふうに、お考えですか。

【大石委員】

東京の子どもたち、人たちはもちろん、全国の人たちが東京へ来ると故郷の国元と何か関わりがあることが認識できます。江戸城の石垣に藩の印が彫ってあったり、地名が残っていたり、藩邸の跡もあるわけです。東京というのは、歴史的に地域的に全てを受け入れる町だったので、それを探してみるのは楽しいと思いますね。

【田川座長】

多分水戸からいらっしゃっているから、茨城では例えば徳川家のお話というのは、学校とか、そういうところで教えることはあるのですか。学校の県立高校とか水戸市立、そういうことでふるさとのことをどういうふうに教えていらっしゃるのか。

【徳川（眞）委員】

東京都さんでも各都道府県でも、大体小学校の高学年で自分たちの町の歴史ということで、歩いて行ける地域の歴史を学んだり、それから、中高校生になりますと、歴史の時間で、地域の歴史ということで、特に課外活動の時間を使いまして、地域の博物館の見学や、私どものミュージアムも年間そういった学校教育における参観というのは絶えずいただいております。でも、それは先ほど言いました、先ほどのシビックプライドで言えば、自分の生まれた町、住ん

でいる町です。

東京は、やはりふるさと感が皆さん東京人にはないということなんですが、私も東京で生まれて東京で育って東京で暮らしている人間なんですが、そういった人間であっても、実はシビックプライドという点ではあまり高くなくて、この取組で考えることになります。ですから、東京都さんも、やはり前にお手伝いをしていた江戸東京博物館さんなどは、本当に学校教育でお見えになる入館者の数はすごい多くて、学校現場ではそれを教えてはいます。でも、日本史とか歴史をやりますよと言うと、お勉強だと楽しくないと堀口さんが先ほど言ったように、やはり楽しく身近に感じるという取組をしなければいけないなというのが。

今、水戸ではどういうことがありますかというと、日本中いろんな地方でやっていると思いますが、郷土かるたというのがありまして、小学校、冬のとき、外に遊びに行けませんから、かるたをして、みんなで楽しくやって、勝った負けたで楽しくやるうちに郷土の歴史を全部覚えると。そうすると、社会に出て戻ってきたときに、みんなで共有できる知識がある、その話ができると、かるたの話になるとか。そういう共通体験というのを東京の子どもたちにするためのプログラムというのは、従来やっていないわけではないんですが、やはり新しい手法を使って編み出していかなければいけないと思うので、私も今日宿題をいただいたなと思って、また堀口さんのお力なんかを借りながら、いいそういう子どもたちの体験プログラムがあったら提案したいと思います。

【田川座長】

ありがとうございました。

他に何かありますか、今の子どもたちに対するそういう。

【堀口委員】

かるたはとても。江戸かるた、江戸・東京かるたとか、すばらしいなと思いました。

家康公の町なんだということももっともっと知ってほしいし、歴史・文化があるということを楽しく伝えるという意味では、ゲームの中で知っていくというのはすばらしいなというふうに思います。

【田川座長】

ありがとうございました。

それからもう一つ、今日はあまり邸宅とか庭園の話がありませんが、この間、随分あって。東京にある昔の藩邸ですね。意外にこれ、後藤さんからもこの間出て、私も今までいろんな文化財の議論をやっていてもちょっと抜けているかなという感じがしているのですが、それについては何か意見がございますか。

【後藤委員】

その話はしたかったところなんですが、いや、ちょっとまた論点が違うとこ

ろから入りたいんですが、大石先生、先ほど全国の藩邸が東京に置かれていて――いや、そういえば、全国から来られた旅行者が必ず東京を見て何かしらつかんでいける場所なんじゃないかというふうに今思ったんですね。その１つが全国の大名藩邸が置かれていて、そこに庭園があったということなんですが。

前回の話で、少し「水」をテーマにして、どうやって庭園の池に水を入れていたんだろうと。崖から引かれた湧水であったりとか、それから海の水、川の水から引かれた潮入の庭園があったり、あるいは小石川後楽園のような上水を取り入れて水道施設で池の水を賄っていたというような、水のところに着目して要は庭園を見ていくとまた１つ見方が変わるのかなと思ったんですが。

そのほかに、庭園の造り方は、それこそ小石川後楽園、漢詩であるとか、六義園だと和歌をテーマにしたりとか、あるいは、全国、あるいは国元の名所をテーマにして庭園を造ったりということで、要は今残っている特に都立公園、都が管理している庭園ですけども、いろんな切り口をしていくと、それこそそれぞれの庭園の特色が、全国の縮図として見えてくるのかなと思っています。

もう少し時代を送っていくと、近代のそれこそ邸宅の庭園もあったりとか、それも都立公園になっている。

私もしょっちゅう庭園に行っていろいろ探っているんですけれども、個別の庭園のパンフレットはあるんですけれども、それを相関的にというか連携しておわず、なかなかつかみづらいのかな。せっかくこれだけ交通網が発達した東京にあって、歩いて行けるところもあれば、例えばバスに乗ったりとか、あるいは地下鉄、鉄道に乗って、そういうところを一緒に交通に関わる組織の人たちと連携することで、より東京の歴史というか、全国の縮図の大名屋敷があったということが分かるんじゃないのかなと思うんです。すごくもったいないかなという気はずっとしていました。

【田川座長】

どうぞ。

【徳川（家）委員】

今の、日本は、私たち、ロシアとかアメリカと比べるから小さな島国と思うんですけど、やっぱり大きいんですよね。地理的な多様性も非常にあってですね。だから、１つの国にちゃんとまとめるとものすごく豊かになれるということはあったと思うんですけれども。

今の後藤先生のお話に絡めて申しますと、大名庭園もそうなんですけど、あと全国の県とか市がアンテナショップを出していますよね。これも回遊させられるんじゃないかということなんですよ。これは要するに江戸の町の大名屋敷の現代版ですと。実際、仙台藩とか、藩邸の中でおみそを作っていたり、それをまた売ったりとかしていたみたいですから。

あとは、シビックプライドはあるようなんですけど、区立小学校の学区ぐら

いなんですよね。極端に狭い。駅前商店街の中とか、そういうところ。でも、非常に密度の高い愛だとは思っていますが。

東京全体としては、ちなみに、「江戸名所図会」とか「江戸八景」――百景ですかね――とかの絵と現代の同じ場所を比べると、現代のほうが圧倒的に醜いというコメントが多いんですけど、でも、それ、人口が10倍になっているから当然なんですよね。30倍ですか、グレーター東京で。でも、今の東京の名所を絵にしましょうというような、これ、まさに小学校で絵の上手な子がうちの近所のここが一番眺めがいいですとかということをやっていって、それが東京全体に対する愛情を育む基になるのではないかと思うんですよね。

例えば聖橋から見たときの鉄道の、黄色もあれば、今の東京でないと見られない、でも、世界のどこにもないいい眺め、絶景というのはあるのですということで、今の東京に対する愛をまず育んでもらって、そこから江戸まで遡っていくというのがよいかというふうに思います。

おっしゃるとおり、本当に住んでいる人たちが楽しい町だったら誰でも来たんですよね。それが観光振興として一番いいだろうというふうに思います。

あと、全国で作っているお酢とか油とかが、ここに行けば全部ありますみたいなのがあってもいいかと思いますね。

【田川座長】

ありがとうございました。

ちょうど時間ですので、本日はこの辺りにしたいと思いますが、多分、東京の子どもたちは、この間、テレビでもやりましたけども、歌川さんの広重ブルーみたいな、ああいうものとか、葛飾北斎の浮世絵自体を見たことがないというか。今、全部売っちゃって、ボストン美術館にあるとか、日本にないので、なかなか見る機会がないんですね。

今日は浮世絵の話はしませんでしたが、来年の大河ドラマが「べらぼう」で、浮世絵の話が出てきて、来年は、そういう意味では、浮世絵というのが大河ドラマの中でどういうふうに日本人の心の中に植えつけられていったかと。北斎とか歌麿さんとか広重さんとか、そういう話が出てくると思いますが。そういう意味では、次回また、絵の持っている価値みたいなものは私はすごく意味のあるものであると思うんですね。当時、写真はありませんでしたから、やっぱり絵というのはすごく大事だったと思うので。

その辺も大事ですし、それから、先ほどお話があった和紙の話ですね。私、本籍は福井なので、越前和紙の話が大好きで、和紙が出てきてうれしいんですが、浮世絵に使う和紙で日本で一番いいのは越前和紙だそうなので、そういう意味で、これから多分来年の大河ドラマの中でもそういう話が出てくるので、この部会で議論する内容で、来年の大河ドラマとうまく合わせて、東京の人たちに江戸文化を伝えることができたらいいなというふうには個人的に思ってい

ます。

私のほうで、今日いただいたお話の中で、大石先生から庶民のリテラシー。私、昔、金沢へ行ったとき、当時、小京都ということがあって、金沢で講演をしたときに「金沢は小京都、小京都」と言ったら、終わった後に質問されて、前田藩は京都の真似なんかしていないと、だから武家文化と呼んでくれとすごく怒られたことがあって、二度と小京都と言うなと講演会で言われたことがありまして、安易に使っちゃいけないんだな、その地域地域で文化が育てられるプロセスみたいなものを大事にするという意味で、それは先ほど言った東京の江戸の場合は武家文化と庶民文化が融合するというところにすごく価値があって、その辺は次のステージに、やるときに幹になる部分として大事にしておく必要があるという感じがしました。

それから、堀口さんのお話は、今、現代的にインスタ映えするというのはまさにそうで、変な写真が出ましたよね、五重塔と桜と富士山という。あの絵は、実は山梨県の河口湖の新倉山という山のお墓なんですよね。お墓から撮った写真なんです。あれ、誰も知らない。私たちも旅行会社も知らなくて、突然どこかの方が写したんです。五重塔から、京都から富士山が見られるわけがないわけで。ところが、あれが一斉に出ちゃったんですね。今、それ、ほとんど、観光庁も使っていますから、逆に言えばですね。五重塔と桜と富士山というのは、やっぱり外国人には確かにインスタ映えするんだけど、真実をあまり表していないなということで。

まあ、ちょっとあまり言えないんですけども、そういう意味で、江戸を表現するときにどういうもので表現するかというのが今日いただいた意見の中に幾つかありましたけど、そういう意味で、世界遺産にするかどうかは別にしても、そういうものがしっかり決まらないと世界遺産に絶対ならないと思うので、この部会の中でそういうものをどういうものにしていくかという議論を次回の中ではしてみたいなというふうに思いました。

そういうことで、今日はお時間いただきまして、皆さん、ありがとうございました。取りあえず今日はこういうことで一旦終わりますが、次回の中でまた意見をいただきたいと思います。

夏休みに入りますので、次回は10月頃を予定しておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

では、事務局のほうから少しスケジュールのお話をします。

【江村観光部長】

ありがとうございました。本日は、貴重な御意見を賜り、ありがとうございました。

今、座長からもお話がありましたとおり、次回の開催は10月頃を予定しておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

事務局からは以上でございます。

【田川座長】

それでは、以上をもちまして本日の会議を終了いたしたいと思います。

どうもお暑い中ありがとうございました。またよろしくどうぞお願いいたします。